

10. 《武士の先駆けだった平将門（たいらのまさかど）》

940年（天慶3）、平将門が、朝敵としてその首が京都でサラシ首（獄門の刑：注1）となりました。その首が、東京まで飛んで帰ってきたところが、東京都大手町のビル群にひっそりたたずむ「将門の首塚」です。その経緯は、以下の通りです。

武蔵国足立郡（埼玉県鴻巣市から東京都足立区）に、地元を仕切る名門豪族がいました。その所領は、国から受領した名田に加え、自ら開墾した墾田もあったことでしょう。息子を国の役所のトップ（国司の出先機関として郡司）に据え、その勢いは磐石でした。

そこに、939年、武蔵国司に、新しい武蔵権守ら（注2）が着任し、足立郡に立ち入り検査を行おうとします。ここで、名門豪族は、慣例を盾にして立ち入りを拒否したため、自分の屋敷を追放されてしまいます。そのとき豪族は、平将門にすぎり、何とか取り成しに成功しました。

将門は、平安京の藤原家に出仕後、下総国の領地（本拠地：現在の茨城県古河市）に帰郷し、その合わない伯父2人と戦いになります。（注3）この戦いで連戦連勝していた将門に、関東各地で国司に痛めつけられた豪族たちがすがったのです。

ところが、同時期に常陸国に追われていた豪族と国司との調停は失敗し、常陸国司のトップを捕縛してしまいます。これをキッカケに、関東一円の国府を征服し「新皇」を名乗りました。

ここに朝敵と見なされ、討伐軍が出されます。「新皇」を名乗って2ヵ月後、将門は、馬に乗って戦いますが、下総国の本拠地近くにおいて奇襲を受けて憤死。その首は、京都に運ばれて獄門の刑に付されました。（注4）

馬に乗った将門は、まさに武士の姿の原形であり、先駆けでした。また、国司の悪政に悩む地元のために非業の死を遂げたとして、多くの伝説が残されました。将門の崇りを恐れてか、大手町には首塚が残されています。

しかし、なぜ大手町に首塚があるかって？ それは、大手町が荒川や利根川の

河口に位置し、多発する水害を平将門のたたりと考えたからだと推察します。

注1：獄門の刑とは、はねた首を平安京にあった門に晒すこと。平将門に初めて適用されました。

注2：国司の役職名とそのランクは、守（かみ）→介（すけ）→掾（じょう）→目（さかん）です。権守の「権」は、守よりランクは低いが守レベルを意味します。

このとき武蔵権守と一緒に武蔵介も着任しています。その武蔵介は、清和源氏初代となる源経基（つねもと）です。源経基から数えて4代目に源義家（八幡太郎：後三年の役で東北地方を安定化）、また8代目に源頼朝（鎌倉幕府を開設）がいます。

注3：将門の祖父は、上総介となってそのまま土着。その長男、次男は、常陸国の有力豪族と血縁関係を結びましたが、三男は下総国を本拠地に私有開墾地を広げていきます。この三男の息子が将門です。つまり有力豪族派の長男・次男と、自力開墾派の三男の息子は、そりが合いませんでした。

注4：この戦いを「天慶の乱」といいます。なお討伐軍の勝利を祈祷した場所に、成田山新勝寺が建立されています。

写真は、①平将門関係の地図（yahoo 地図を背景に細見作成）、②将門の首塚（細見撮影）、③掛け軸に書かれた将門像

①



③



②

